

# 僕はこれからだ

小川未明

青空文庫



村からすこし離れた、山のふもとに達吉の家がありました。彼は学校の帰りに、さびしい路をひとりで、ひらひら飛ぶ白いこちようを追いかけたり、また、田のあぜで鳴くかえるに小石を投げつけたりして、道草をとっていたこともあります。そして、裏の松林にせみの鳴いている、我が家が近づくとき急になつかしくなつて、駈け出したものでした。

父親というのは、体つきのがつちりした、無口の働き者でした。今日じゆうに、これだけ耕してしまおうと心で決めると、たとえ日が暮れかかっても、休まずに仕事に精を入れるという性質でしたから、村の人たちからも信用されていました。ところが事變の波は、こうした静かな田舎へも押し寄せてきました。彼には召集令が下つたのであります。カーキ色の服に戦闘帽を被つて、赤いたすきをかけた父親は肩幅の広い姿勢を毅然として、日の丸の旗を持ったみんなから送られて、平常は、あまり人の通らないさびしい路を、町の方へといったのでありました。それは、ついこのあいだのことと思つたのが、はや二年ばかりになりました。そして、その父親が、中支の戦線で、激戦の際、戦死を遂げたという知らせがとどいたので、さすがに、家のものはじめ、村の

人々は、まったく夢のような気がしたのであります。あの健康な、意志の強い男が、もうけつして、もどることがないと思つたからでした。

達吉の母親は、やせ形な、女らしい、優しい性質の人でした。父親が、いなくなつてから、達吉は学校が退けて、途中から友だちと別れて一人ぼっちで帰ると、こんど父親に代わつて母親が、手ぬぐいを被つてうつむきながら、たんぼで野菜の中に埋もれてせつせと働いているのを見ました。

しかるに、この母親とも別れた。達吉は、いつになつても、その日のことを考えるとなまらなくなるのでした。それは、父親の戦死を聞いたときよりも、もつと悲しさが深く胸に迫つてくるのでした。

母親は、まくらもとへ達吉を呼びました。

「もし、私が病気で死んだら、おまえは、東京の伯父さんのところへいくのだよ。伯父さんも、いい人だから、よくいうことをきくのだよ。」

そのとき、母親の目から、涙が落ちて、黄色なほおを伝つて、まくらをぬらしたのです。

「お母さん、死んじやいやだよ。」と、達吉は、急に大きな声で泣き出しました。する

と、てつだいにきていた、村むらの女おんなの人が、あわててへやへ入はいってきて、

「なんで、お母かあさんが、坊ぼうだけ残のこして死しになさるものか。じきによくなくて、起きなさるから、さあ、すこしあつちへいつて遊あそんできなさいね。」と、外そとへ抱だくようにして、つれていったのでした。

その夜よるであつた。すさまじい北風きたかぜが吹き募つつた。秋あきの深ふかくなったという知らせのように、風かぜはヒウヒウと叫さけんで、野原のほらをかすめ、林はやしの頭あたまをかすめて、木きや、枝えだについている葉はをことごとくもぎとつていったばかりでなく、いっしよに達吉たつきちの母親ははおやの命いのちもさらつていったのです。

翌朝よくあさ、東京とうきようからきた、伯父おじさんが着つきました。そして、数日すうじつの後のちには、達吉たつきちは、その伯父おじさんにつれられて、思おもい出での多い、自分じぶんの生うまれたこの村むらから去さらなければならなかつたのでした。

伯父おじさんの住すんでいる町まちは、都会とかいの片端かたはしであつて、たてこんでいる小さな家々いえいえの上に、雲くものない空そらから日ひが照てりつけていました。店みせにブリキ板いたがすこしばかり置いてあるだけの貧まずしい暮くらしであつたが、子供こどもがないところから、伯父おじさんも、伯母おばさんも達吉たつきちをかわいがつてくれました。

「なに、工場などへいかなくたつて、家にいて、俺の手助けをすればいい。」と、伯父さんは、やつと高等小学校を出たばかりの達吉を少年工として、たとえこのごろは景気がよくても、工場へやるのにしのびませんでした。

「ああ、それがいいよ。」と、伯母さんも、いつていました。

隣家は、薪炭商であつて、そこには、達吉より二つ三つ年上の勇蔵という少年がありました。

「おい、達ちゃん、リヤカーに乗せてやろうか。これから、この炭をとどけにいくのだから。」と、道の上に茫然として立っている達吉を見つけて、声をかけました。

「そして、帰りに、梅の実をもうでこようよ。」と、勇蔵は元気にいいました。

達吉は、リヤカーに乗せてもらつて、車の上から、はじめて見る町の景色を物珍しそうにながめていました。勇蔵は、品物の配達を終わると、軽くなったリヤカーをさらに勢いよく走らせて、町を突っ切り、原っぱへと出ました。広々とした原っぱには、一角に屋敷跡のようなところがあつて、青々とした梅林には、実がたくさん生っていました。

「あれごらんよ、すっかり種子が固まつているのだけ。」と、勇蔵が、酸っぱそうな口

つきをして、いいました。

達吉の目の中に、このとき、北方の憂鬱な黒い森の景色がよみがえったのだ。そこは、自分の生まれた村である。いまも、陣々として、頭の上を吹く風の中に、たんぼの野菜の葉が白い裏を返すのである、そして、やつれた母の涙ぐんだ顔が浮かぶのでありました。

「なにをぼんやりしているんだい。達ちゃんは、実を拾わないの。」と、勇蔵は、棒きれを枝に向かつて投げつけると、雨のように、白いうぶ毛のある円い実が、ころころと足もとにころげて落ちました。

「炭も、煉炭も、じき、切符制度となつて、僕も仕事がなくなるから、工場か、会社へ勤めようと思つているのさ。」と、帰りに勇蔵が、達吉に話しました。

「自分は、田舎にいれば、いまごろ、くわを持って百姓をしているんだが。」と、達吉は考えました。

ある日、伯父さんは、外出の支度をしながら、  
「懇意の准尉さんで、陸軍病院に入っていないさるのを、これからまいにいくのだ。達吉も、いっしょにこないか。」と、いいました。

達吉は、父親が戦死してから、戦争にいった兵隊さんに対して、なんとなくいしれぬ親しきをもつようになったのでした。

「ひよつとしたら、お父さんのことが聞かれるかもしれない。」と、思ったので、飛び立つように喜びました。

ひでりつづきの後なので、坂道を上ると、土のいきれが顔をあおつて、むせ返るよう感じました。一面に白く乾いて、歩くところりが立ち上りました。伯父さんは、幾たびとなく休み、額からにじむ汗をふきました。

「ちつとも風がないな、一雨くるといいのだが、毎日降りそうになるけれど降らない。」と、ひとりごとのように、伯父さんは、いいました。

木々の葉が、てらてらとして、太陽の熱と光のためにしおれかけて、力なく垂れているのが見られました。そして、せみの声が、耳にやきつくようにひびいてきました。

「あの、高い、白い家が病院だ。」と、伯父さんは、彼方の森の間に見える大きな建物物を指しました。

二人は、いつかその病院の病室へ案内されたのでした。准尉は、白い衣物のそでに赤十字の印のついたのを被て、足を繃帯していました。その二階から、ガラス

窓<sup>まど</sup>をとおして、下<sup>した</sup>の方<sup>ほう</sup>にはるか<sup>まちまち</sup>の町々<sup>まちまち</sup>までが、さながら波濤<sup>はとう</sup>のつづくごとくながめられました。伯父<sup>おじ</sup>さんと、兵隊<sup>へいたい</sup>さんと話<sup>はな</sup>している間に、日<sup>あいだ</sup>の光<sup>ひ</sup>が陰<sup>ひかりかけ</sup>つて、空<sup>そら</sup>は雲<sup>くも</sup>ったのでした。たちまち起<sup>お</sup>こる風<sup>かぜ</sup>が、窓<sup>まど</sup>の際<sup>きわ</sup>にあつたあおぎりの枝<sup>えだ</sup>を襲<sup>おそ</sup>うと葉<sup>は</sup>はおびえたつように身<sup>み</sup>ぶるいしました。

「たいへんに暗<sup>くら</sup>くなつた、なんだか夕立<sup>ゆうだち</sup>がきそうですね。」と、准尉<sup>じゆんい</sup>が、いいました。伯父<sup>おじ</sup>さんは、だまつて、目<sup>め</sup>を遠<sup>とお</sup>くの地平線<sup>ちへいせん</sup>へ馳<sup>は</sup>せていました。そのほうには乱<sup>みだ</sup>れた黒<sup>く</sup>ろくも雲<sup>くも</sup>がものすごく垂<sup>た</sup>れさがつて、町々<sup>まちまち</sup>が、その雲<sup>くも</sup>のすそに包<sup>つつ</sup>まれようとしていました。どこかの煙突<sup>えんとつ</sup>から、立ち上<sup>た</sup>る白<sup>しろ</sup>い煙<sup>けむり</sup>が、風<sup>かぜ</sup>の方<sup>ほう</sup>向<sup>こう</sup>へかきむしられるように、はかなくちぎれています。ぴかりと光<sup>ひか</sup>ると、達吉<sup>たつきち</sup>は、はつとして、

「雷<sup>かみなり</sup>だ!」と思<sup>おも</sup>つた瞬<sup>しゆんかん</sup>間に、鼓膜<sup>こまく</sup>の破<sup>やぶ</sup>れそうな大きな音<sup>おと</sup>が頭<sup>おと</sup>の上<sup>あたま</sup>でしだして、急<sup>きゆう</sup>に大<sup>お</sup>粒<sup>おつぶ</sup>の雨<sup>あめ</sup>が降<sup>ふ</sup>つてきました。また光<sup>ひか</sup>つた! そのたび大空<sup>おおぞら</sup>が、燃<sup>も</sup>えるように青白<sup>あおしろ</sup>いほのおでいろどられて、明<sup>あか</sup>るく家屋<sup>かおく</sup>も、木立<sup>こだち</sup>も、大地<sup>だいち</sup>から浮<sup>う</sup>き上<sup>あ</sup>がって見<sup>み</sup>られた。

「これは不気味<sup>ぶきみ</sup>な天候<sup>てんこう</sup>になつたものだ。」

伯父<sup>おじ</sup>さんは、あつけにとられながら、やつと口<sup>くち</sup>をききました。そのとき、達吉<sup>たつきち</sup>が、准尉<sup>じ</sup>の顔<sup>かお</sup>を見ると、戦地<sup>せんち</sup>へいつてきた兵隊<sup>へいたい</sup>さんだけあつて、いささかのおじ氣<sup>け</sup>も色<sup>いろ</sup>に見<sup>み</sup>

せるところか、かえつて微笑ほほえんでいました。

「戦争せんそうのときは、こんなですか？」

達吉たつきちは、ぴかり、ゴロゴロ、ド、ドンという電光でんこうと雷鳴らいめいのものすごい光景こうけいに、父ちちが戦死せんししたときのことを想像そうぞうして、つい思おもったことを口くちに出だして、きいたのであります。すると、准尉じゆんいは、

「まったく、これと同じおなです。すこしも違ちがいがありません。徐州攻撃じよしゅうこうげきのときなどは、もつとひどかったです。」

「ほ、ほう、こんなですか。」

「なにしろ、砲弾ほうだんが炸裂さくれつすると、たちまち目の前まえが、火の海ひうみとなりますからね。」

達吉たつきちは、あの、みんなから送おくられて、さびしい田舎道いなかみちをいった父親ちちおやの姿すがたを思おもい浮かうべました。苦くるしくなつて、熱あついものが胸むねの裡うちにこみあげてきました。しかし自分じぶんは、いま兵隊へいたいさんの前まえにいたのだと気がつく、彼は、我慢がまんして、じつと、雷鳴らいめいの遠ざかつていく空そらを見つめていました。そのうちに、雲くもが切れて、青い空あおそらがあらわれはじめたのであります。

薪炭屋しんたんやの勇蔵ゆうぞうは、いよいよ昼間ひるまは役所やくしよの給仕きゆうじを勤めて、夜よるは、勉強べんきようをする

ため、学校へいくことになりました。

ここは、町の近くにあった、原っぱです。子供たちが、夏の日の午後を楽しくボールを投げたり相撲をとったりして遊んでいました。小さな弟妹の多い勇蔵は、家にいれば、赤ん坊を負って守りをしなればならなかったのです。だから、勇蔵は、ボールを投げる仲間に入ることもできなかったもので、ぼんやり立ってほかの子供たちの投げるのを見物していました。

そのそばへ達吉がやってきて、

「勇ちゃん、僕が、代わって赤ちゃんをおんぶしてやるから、君は入って、ボールをおやりよ。」と、いつて、無理に勇蔵から赤ん坊を奪って、彼に好きなボール投げをさせようとしたのでした。

「達ちゃん、ありがとう。じゃ、十分間ばかりね。」

「もつと、長くたってかまわない。」

二人が、原っぱで、こんな話をしていたときでした。ちょうど達吉の伯父さんは、町の一軒の家へいつて、壊れたといを修繕していました。戸口に遊んでいた、長屋の子供たちは、屋根の上で、眼鏡をかけて、仕事をしているおじいさんを見て、

「おじいさん。」と、親しげに声をかけました。

「あいよ。」と、伯父さんは一人、一人の子供の顔を見わけようとも、また注意をしようともしなかつたけれど、そのいずれに対しても親しみを感じて、やさしく返事をせずにはいられなかつた。

「おじいさん！」と、子供たちは、いいお友だちを見つけたように、口々に、何度も同じ言葉をくり返して、熱心に仕事をしているおじいさんの注意をひこうとしたのであります。

達吉の伯父さんは、新しく造つてきた、ぴかぴか光るブリキのといをのき下に当ててみて、雨水の流れる勾配を計つていました。そのうち、不覚にも、腐れていたひさしの端へ踏み寄つた刹那であります。垂木は、年寄りの重みさえ支えかねたとみえて、メリメリという音とともに、伯父さんの体は地上へ真つさかさまに墜落したのでした。子供たちは、びっくりして目をみはつたが、つぎに怖ろしさのあまり、悲鳴をあげて、

「たいへんだ！」と、叫びました。

ながや長屋じゅうのものが、総出となつて、この気の毒な老職人の周囲に集まりました。「早く、家へ知らせなければ。」

「それより、先に医者へつれていくのだ。」

「おじいさん！」

「おじいさん、だいじょうぶか。」

一人が、抱き起こしながら、耳もとへ口をつけて呼んでも返事がなかったので、みんなの顔色は真つ青になった。しかし、しばらくすると、身動きをしたので、死んでいないことがわかったのです。

この話が、たちまち、口から口へ伝わって、あたりの騒ぎになると、原っぱに遊んでいた子供たちの耳にも入ったのです。勇蔵に代わって赤ん坊の守りをしながら、ボールを見ていた達吉の耳へも、一人の子供が飛んできて、伯父の災難を知らせました。

「ほんとう？」と、達吉は、寝耳に水の思いで、赤ん坊を負ったまま駆け出すと、脊中の子は、火のつくように泣き出した。それから、十分とたたぬうちに、勇蔵が、リヤカーに伯父さんを乗せて引き、近所の人たちが車の左右に従い、町の中を両断する広い道路をすこしへだてた、骨つぎ医者へ連れていきました。もとより、達吉も、いっしょについていきました。

電柱に、「骨つぎもみ療治」と看板のかかっているところから、路次へ曲がる

と、突き当たりに表側を西洋造りにした医院があります。入り口にぶらさげてあつた金網のかごの中に、せきせいいんこが飼つてあつて、急にそうぞうしくなつたので、鳥はびつくりしたのか、目をまるくしながら、甲高な声でキイー、キイーといって、奥の方へ取り次ぎをするごとく鳴きつづけました。

しかしながら、伯父さんは、打ちどころが悪かつたので、ついに五、六日めに亡くなつたのであります。

孤児となつた達吉に、こうして、また不幸がみまつたのでした。彼は、伯父さんが死んでから、後に残つた伯母さんと、しばらく途方に暮れていました。勇蔵も、近所の人たちも、同情をしてくれたけれど、生きる道は、畢竟、自分が働くよりもほかにないということを彼は自覚したのです。そのとき、伯父さんの仲のよい友だちであつたペンキ屋の親方が訪ねてきて、

「手が足りなくて困っているのだ。おれのところへきて働いてくれないか。」と、いいました。

達吉はすでに働く決心したからには、どこだつてかまわなかつた。彼は、すぐいいくことにしたのです。ペンキの入つたかんをぶらさげて、高い屋根へ上るのは容易なこと

ではありませんでした。びくびくすると、かえつて両脚がふるえました。

「平気で、どんなところでも、鼻唄をうたつて歩けるようにならんければ、一人まえとはいえない。」と、親方は、笑いました。

「そうだ、人間のできることで、自分にできぬというはずはない。」と、齒ぎしりをして、たとえ危険な場所へでも、親方が上るところへは、自分も上つていったのでした。かくして、一年とたたぬうちに、彼はもう大胆にりっぱに、仕事ができるようになりました。

あるとき、親方は、つくづくと彼の仕事ぶりを見ていたが、

「おまえは、いつまでも、ペンキ屋で暮らそうとは思わないだろうが、いつたいなにになりたい気なのだ。」と、彼にききました。

「僕は、軍人になりたい。」と達吉は、答えたのです。いつか准尉にあつてから、彼はそう心の中で思つたのでした。

「軍人にか、それはいい。おまえは、脊は低い、なかなか強情だから、いい軍人になれるだろう。」と親方は、達吉の意見に、反対しませんでした。

勝ち気の達吉は、同じ年ごろの少年が学校へいくのを見たりすると、うらやむ

かわりに、夜も、疲れた体を小さな机の前にもたせて、航空雑誌を読んだり、地理や、歴史を復習したりしていました。そして、昼になれば、彼は、普通の子供たちなら、とうてい上がれない、目のまわりそうな高い建物の頂に立って、

「学校で勉強するよりか、こんなところで、大人といつしよに仕事をする己のほうが、よほど偉いんだぞ!」と、だれに向かかっていうとなく、独りで豪語しました。

それは、彼が、東京へきてから、三たびめに迎える夏の暑い日のことでした。緑の多い丘に建っていた教会堂の前を通りかかると、たくさん人が集まって、塔の上をながめていました。

「どうしたんですか。」

「あのたくさんなからすが、はとをねらっているのですよ。」

このごろ、どこのごみ捨て場をあさつても、あまり食い物が見つからないので、都会にすむ餓えたからすたちは、弱い鳥をいじめてその肉を食べることを考えたのでした。

それで、はとの巣を襲ったのです。いつ、どこから飛んできたのか、二羽のはとは、ここを安全な場所と思って、塔の屋根に巣を造りました。そして、やがて子供を産んで、育てていました。これを知っていて、からすは、いま計画的に、群れをなしてやってきた

のです。早くも悟つた親ばとは、巢の奥の方へ二羽の子ばとを隠して、母ばとは、胸で子供をおおい、たぶんそれは父ばとであつたでしょう、いちばん端にうずくまつて、体で巢の入り口をふさぐようにして、敵とにらみ合つていました。

どうなることかと、達吉もいつしよになつて、見ていました。すると、その中の獐猛な一羽のからすが、ふいに父ばとに飛びかかつて、とうとう巢から外へ引きずり出してしまいました。待つていたとばかり、ほかのからすたちが、四方から寄つてたかつて、哀れなはとを奪い合い、最後に血にまみれたはとを屋根の上へたたきつけて、たがいにくちばしでちぎりはじめたが、あつという間に、こうかつな一羽がその屍をさらつてどこかへ飛び去ると、あわてて三羽、四羽、その後を追いかけていきました。

「なんて、ひどいことをしやる。まだ、あの巢の中には、はとがいるから、それも喰い殺されるだろう。」

こういつて、見ている人々が、小石を拾つて、からすに向かつて投げつけていた。しかし、石はそこまでときませんでした。からすは、石の当たらないのを知つていて、こちらのことは気にも止めずに、だんだん巢の方へ近寄つて、じつと機会をねらつていました。

「わるいやつだな。」と、達吉は、つくづく思いました。彼の胸は、憤りのために、どきんどきんと鳴りだしました。

おそらく、子供を救うために、自分を犠牲にしようと思悟したのでしよう。ふいに、母とが、巢から飛び出した。からすが、なんで、それを見逃そう。我先に獲物にありつこうと翔るはとに向かつて突進しました。母とは、巧みに方向を変えて、子供たちのいる巢から、敵を遠方へ遠方へと誘ったのであります。見ていると、塔の頂の空を高く二、三回もぐるぐるまわってから、下の町の方へ、できるだけの速力で、飛び去っていきました。その後を、カアカアと叫びながら、黒くなって、からすが執拗に追いかけていきました。

けれど、まだ二羽、三羽、意地悪いからすが残っていて、どこへも去らずに、塔の屋根に止まって、険しい目で巢をねらっていました。そこには、親鳥を失った、かわいそうな子ばとが怖ろしさのためにふるえているのでした。それと知った、達吉は、もうなんでも我慢ができました。

「よし、あの不埒なからすめを追いはらってくれよう。そして、子供を己の懷に抱いてきてやろう。」

達吉は、人々がなんといつてもかまわずに、柵を乗り越えて、寂然とした教会堂の敷地内へ入り込み、窓わくを足場として、さるのごとく、といを伝つて、建物の壁を攀じり、急角度に傾斜している屋根へはい上がろうとしました。

「おうい、やめろ、あぶないぞう！」と、下からわめく声がきこえました。この声は彼の耳に入つたけれど、

「なに、くそ……。」と、彼は、返事をするかわりに、齒ぎしりをしていた。

突然、人間の頭が、によつきりと屋根の端から伸び上がると、さすがにからすは、これに敵わぬと思つたか、いちはやく、どこかへ逃げていきました。

スレートの面は、太陽の熱で油を流すごとく焼けていて、足の裏へ、針を刺すように痛さを感じさせた。

「もう、降りろう！」と、見ていたものの中から注意するものがあつた。

達吉は、ただ登らなければならぬ気がしていた。顔を上げると、まだ巢のところまで三、四メートルありました。同時に下を見ると、すぐ近く大きな木が目に入り、四方へ張つた枝の柔らかな緑色は毛氈を拡げたように、細かな葉が、微風にゆれていました。そして、こんな際に、どうしてか、いつか病院の窓から見た、あおぎりの幻覚が浮

かんだ。

「己は、どうすればいいのか？」さつと感激の失せた刹那、自分のすることがわからないくなり、心がぐらつくと足の感覚までなくなつて、体がずるずると下へ滑りはじめた。堅いスレートにはどこにもつめの立てようがない！

彼は、絶体絶命を感じた。数秒の後に、自分の体が、幾十尺の高いところから地上に落下して粉碎するのだと意識するや、不思議にも、気力が出て跳ね上がった。彼は、屋根を蹴ると、眼下の大木を目がけて、それにしがみつこうとして飛んだ。

軽業師にやれる離れわざなら、なんで人間生死の瀬戸際にできぬというはずがありましよう。

達吉は、天地が真つ闇だった。大波が、自分を呑んだ。体は前後上下に揺れていた。わずかに、目を開けると、しっかりと自分はやきの木の枝にしがみついていた。「おお、己は、生きているぞ！ 己は、助かったのだ。お父さんに誓います。僕は、軍人になります。神さまに誓います。僕は、かならず飛行兵になります。」

とつさに、希望が頭にひらめいた。どこを見てもただ明るく、さんらんたる光のうちにいるのを発見した。どこかで、がやがや人の声が、きこえるような気がしたけれど、達

吉<sup>つきち</sup>は、ただ、手足<sup>てあし</sup>に力<sup>ちから</sup>を入れて、どうしても強<sup>つよ</sup>く生<sup>い</sup>きなけ  
ばならぬということだけし  
か考<sup>かんが</sup>えていなかっ  
た。

このときの、彼<sup>かれ</sup>の目<sup>め</sup>は、からすの目<sup>め</sup>よりも、さときいきいきと輝<sup>かがや</sup>  
いて、いったん心<sup>こころ</sup>につ  
かんだものを一生<sup>しよめが</sup>逃<sup>のが</sup>すまいとしていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「新児童文化 第3冊」

1941（昭和16）年7月

※表題は底本では、「僕《ぼく》はこれからだ」となっています。

※「彼《かれ》は、屋根《やね》を」は、第1刷では「彼《かれ》は、夢中《むちゆう》で屋根《やね》を」ですが、第2、3、4刷では「彼《かれ》は、屋根《やね》を」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 僕はこれからだ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>